

Y20a 長野県天文文化研究会の現状～諏訪天文同好会の多様な活動～

陶山徹（長野市立博物館）、渡辺真由子（茅野市八ヶ岳総合博物館）、大西浩次（国立長野高専）、大西拓一郎（国立国語研究所）、茅野勝彦（諏訪天文同好会）、早川尚志（名古屋大学）、衣笠健三（国立天文台野辺山）、青木勉（東京大学木曾観測所）、野澤聡（獨協大学）、宮地美由紀（塩尻星の会）、百瀬 雅彦（塩尻星の会）、丸山卓哉（大町エネルギー博物館友の会フォーマルハウト）、長野県天文文化研究会メンバー

長野県内では、「長野県は宇宙県」をキーワードに、宇宙を教育や観光へ活かす活動を進めてきた。天文文化研究会は、この宇宙県の活動におけるワーキンググループの一つである。現在、研究会では、日本で最初期につくられた地方天文同好会である、諏訪天文同好会について調査研究を進めている。

諏訪天文同好会は、今から約100年前の1922年に発足した。発足の原因の一つとして、当時の天文同好会（現東亜天文学会）の会長であった山本一清が長野県で講演会を行ったことが挙げられる。この講演会の後、当時、諏訪中学校の教師であった三澤勝衛などを中心に天文同好会諏訪支部が作られる。この同好会は大人向けであったため、子どもたちが入りやすい会として、諏訪天文同好会が発足する。諏訪天文同好会は、とかげ座新星を発見した五味一明や東京天文台台長となった古畑正明など様々な人材を輩出することとなる。諏訪天文同好会は、変光星の観測を多数行い、天文月報で報告するなど、精力的な天文活動を行っている。また、霧ヶ峰におけるビーナスラインの反対運動や日本星空を守る会の設立など自然保護運動にも行っており、非常に注目すべき点がある。本講演では、この諏訪天文同好会の活動内容や後世に及ぼした影響について紹介する。